

“口から食べたい”を支える困難症例への食事援助のわざ

小山 珠美（東名厚木病院 摂食嚥下療法部

日本摂食・嚥下リハビリテーション学会認定士）

人間にとって「口から食べる」ことは、生命活動に必要な栄養をとることに加えて、味を楽しみ、社会的交流を深めるなど、幸福に生きる生命の根幹をなす生活行動である。しかしながら、胃瘻栄養などの代替栄養が普及したことにより、経口摂取の可能性があるにもかかわらず、非経口栄養での長期的な栄養管理が常態化してきた。このことは、必要な栄養が投与されたとしても、心身の廃用症候群を引き起こし、健康回復を阻害するだけでなく、人としての生命力の消耗を引き起こす。そのためにも、我々看護職は患者の口から食べる良好な機能を見極め、適切なケアにより摂食・嚥下機能の回復、自立した食事行動への援助を強化していく必要がある。

本シンポジウムでは、脳卒中急性期の身体侵襲がある時期から、生活者としての心身の機能を高める看護ケアを充実した上で、早期に経口摂取を開始するための技と実績を紹介した。安全に経口摂取を進めていくためには、患者の摂食・嚥下機能、全身状態をアセスメントし、気管カニューレ留置中であっても、口腔内環境を整え、呼吸ケアを行い、覚醒を促し、ポジショニングを良好にしつつ早期に経口摂取を開始するテクニックが重要となる。加えて、セルフケア能力を高めながら生活者としての健康改善を早期に取り戻していくための摂食・嚥下ケア技術も欠かせない。気管カニューレ留置中から摂食訓練を始めて1ヶ月で経口摂取へ移行し、カニューレ抜去に至った症例、重度仮性球麻痺で高次脳機能障害を合併した高齢者の2事例を通して、経口摂取開始までのケアや評価方法、その後の経口摂取ステップアップを図るための食事介助技術について動画を用いてケアの技を紹介した。

今後さらなる医療・福祉・教育においても口から食べる尊厳を守ったアグレッシブな看護の実践的スキルアップおよび教育の普及が求められる。